

第1章 戦場

従軍生活

語るできなかった通信隊

そとおかたえこ
外岡妙子さんのお話から

太平洋戦争開戦のころの月寒は軍都一色ですから、兵隊が行進していても何の違和感もなく、陸軍病院もありましたので、痛々しい患者さんが歩いていても、私たちに違和感はありませんでした。

○もんぺ 袴の形をして、足首のくくれている股引に似た衣服。保温用または労働用。

○防空頭巾 空襲などの時に飛んでくるものや落ちてくる物、火災から頭部を保護するために頭にかぶった綿入りの頭巾。

○援農 日本全国で十二歳から二十五歳の中学生や女学生が働き手の男性が戦場に行つて手薄になつた農村に働きに行つたこと。

○女子挺身隊 昭和十八(一九四三)年、十四歳以上二五歳以下の未婚の女

そのころ、私は女学校に通っていました。服装は、初めは制服でしたが、そのうちにもんぺ、防空頭巾をかぶつて、胸には白い布に血液型と名前とを張りつけて、何かあつてもはっきり分かるような、そういうような目印を付けました。

女学校が終わるころは援農、援農で、札幌駅の北側にあつた帝国製麻のところに行つて畑を起こしてみたり、自分の家のちよつとでも空いている土地があれば、じゃが芋やカボチャを植えて足しにしていました。

そして、昭和十九(一九四四)年、女学校の卒業式と同時に北部軍司令部の通信隊に指名されて、部署に配置されました。それまでは実感がなかつたのですが、緊迫した気持ちになりました。通信隊は一クラスから五名ぐらいでした。どういう基準で選ばれたかは全く不明です。紙切れ一つで、「あなたたちは月寒の部隊へ行きます、女子挺身隊という名前で重大な仕事です。」と言われて、あとは何も説明がありませんでした。そして中島公園の北側にあつた札幌市立高等女学校(現北海道札幌東高校)に行つて、通信を即席に、それから規律とか、上官に会つたら上体を何度傾けて礼をするとか習いました。家に帰つてもそのようなことは一切言えません。秘密でした。辛かつたです。

性が市町村長・町内会などの協力により構成した勤労奉仕団体。昭和十九（一九四四）年に女子勤労令で強制された。

○将校 軍隊において、部隊指揮権を持つ、少尉以上の軍人。

○内務班 兵舎内で兵士が生活する組織単位のこと。睡眠、食事、点呼などを行い、配置先へ通う。女子通信隊員は三交代勤務なので、夜勤の当番日は防空作戦室から約二百メートル離れた寄宿舎で睡眠と食事をとる内務班の生活をしていた。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るために作った穴や地下室。

私の仕事は、「情報室」で有線での情報を受け取ることでした。防空室の狭いところで仕事をし、敵機があらわれると、後ろに控えている班長さんが紙に書いたものを作戦室に持っていくのです。作戦室は防空室の地下にあり、びっくりするぐらい広くて、大きな北海道地図がありました。その北海道地図の上に網走なら網走というランプがあります。何でもないときは白です。私たちの持っていった紙を見て警戒警報となると、将校さんが長い棒で指さして、警戒警報がラジオで発令される。そうすると街中では皆さん避難準備をしたと記憶しています。仕事の内容は家庭では決して話してはいけない、絶対の秘密と言われていました。

家に帰るときは綿のように疲れて眠っていました。でも、交代勤務はきちっと決まっています、内務班という宿舎で夜中の二時に交代。ぐっすり寝たころに起床の号令がかかりました。それからよろよろと起きて、身支度し、そして、班長さんに連れられて、気を引きしめて防空室へ行くのです。途中上官がいますと、敬礼でご挨拶をします。私語は絶対だめでした。

昭和二十（一九四五）年六月ころになると、偵察機が来始めました。防空室に交替勤務で出勤する時、「今日は帰って来られないかもしれない」と思う日もあり、次第に緊迫した空気になってきました。家族が月寒の防空壕に入っていた時もありました。私が防空頭巾をかぶり、「では、行って来ます」とあいさつすると、防空壕のなかからじっと見つめるあの時の母の眼が、今でも忘れられません。

私は空襲にあったことはないのですが、防空室の裏庭に



兵隊になる兄の見送り

イメージ図

語りごとができなかった通信隊

○たこつぼ 小さな穴を掘っただけの一人用の防空壕。タコ漁のたこつぼの形から名付けられた。

○B 29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万mの高高度を飛んだ。日本の空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島、長崎への原爆投下にも使われた。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送をさすことが多い。

○茫然自失 あっけにとられ、我を忘れてしまっさま。

○赤紙 人を軍隊に呼びあつめる命令書。赤の紙

たこつぼがありました。防空室内部にいるときは頑丈なコンクリートの建物の中なので安全ですが、外にいる時にB 29の偵察機が来て号令がかかると、私たちは一人一人「たこつぼ」に入るのです。頭から毛布をかぶって、兵隊さんが木の枝を上にかけてくれました。そしてじっと待っている、解除になって、もそもそと出てくるのです。

昭和二十(一九四五)年八月十五日の終戦の日、庭に集まるよう言われて行きますと、兵隊さんが泣きそうな顔をして手を握って下を向いているのです。どうしたのかしらと思つて私たちがそこに並びましたら、玉音放送でしたが、全く何を言われているのか聞こえないのです。ただ、戦争に負けたということは分かりました。

びっくりしたのは、私たちが直接したわけではないのですが、証拠を残しておきたくないというので、その日からどんどん書類や機械も、空が焦げるほど焼いたのです。それから、早く帰りなさいと急に言われて、何とも言えない複雑な気持ちで自分の家へ戻りました。あんなに一生懸命決意して入った軍司令部の女子通信隊なのに、突然のことで理由も分かりません。本当になんといいましたよ、茫然自失の身です。勝利を信じていたのに、恐ろしいものです。

家族については、兄がいて赤紙が来ました。一時旭川師団に入隊したと記憶しています。家に「祝」と書いた旗を立てて、それを持って駅まで行って万歳、万歳。帰ったら母がいなくて、あれっと思つたら、押し入れを閉めて泣いていたという、そういう思い出があります。気丈にして



防空室に出勤する時の様子

イメージ図

を用いたので「赤紙」という。

○特攻隊 特別攻撃隊。陸海軍の航空機・小艇に敵空母・艦船への体当り戦法を行う攻撃部隊。

○学徒出陣 兵役法などの規定により大学・高等学校・専門学校（いずれも旧制）などの学生は二十六歳まで徴兵を猶予されていたが、兵力不足を補うため、太平洋戦下の昭和十八（一九四三）年、学生・生徒の徴兵猶予を停止し、陸海軍に入隊・出征させたこと。

いても、やっぱりそこは相当切羽詰まっていたからね。

戦後、私は鹿児島県の知覧町（現南九州市）にある特攻隊の記念館に見学に行きました。そこに展示されている特攻隊員の遺書には、両親への感謝の言葉が多いのですけれども、特にお母さんに対して「僕は死んでいきます」という勇ましいことを書いていました。そのような教育が浸透していたのです。軍に付いて戦地に行く新聞記者だって、見ていたら分かるのですが、本当のことを言ったらすぐ捕らわれるので、真実は書けなかったのです。

学業半ばに学徒出陣：若き命を散った人：あの人たちが今の時代にいたら泣けてくるでしょうね。ゲームで戦争遊びをしているのを見たら本当に怖いですね。本物の戦争はゲームと違い悲惨です。いじめ、暴力、大人の一部の悪い行動。国のために死んだ人たちはそれを知ってどう思うでしょうか。こんな世の中にするためにあの戦争で死んだのではないのです。

先祖のおじいさん、おばあさんが頑張って、あなたたちの両親を育ててきました。平和な暮らしが当たり前と考えないで、この戦争と皆さんがつながっていることを忘れないでください。これから先のことは、今の若い人が決めていきます。世界の動きを知り、歴史をきちんと学んで、語り継いでいってほしい。もう二度と戦争を起こさないために、若い人たちには語り部の話を聞いてほしいです。かけがえのない平和に感謝して、一日一日を大切に暮らしていただきたいと願っています。

DATA

平成22年度中央区平和事業
聞き取り

- ・平成22年8月25日
- ・中央区役所



外岡妙子(そとおか・たえこ)さん

- ・大正15(1926)年生まれ
- ・札幌市中央区在住

語り部ができなかった通信隊